

CASE 3

佐用高校（兵庫・県立）

行政と目線を合わせた「地域協働プロジェクト」で 地域への愛着心を育む



家政科長
前野恵美先生



佐用町企画防災課
まちづくり企画室長
谷本美沙さん

地域と高校のニーズが合致し、
地域協働プロジェクトが始動

佐用高校家政科は、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、2020年度から3年間、「地域協働プロジェクト」として地域と連携した教育活動に取り組んできた。きっかけは、当時の校長と家政科長が、町の役場に協力を持ち掛けたことだった。当時を知る、佐用町企画防災課まちづくり企画室長の谷本美沙さんは、次のように振り返る。

「佐用町では人口減少が進み、子どもの数も減っています。特に、住民の重要なライフラインであり、佐用高生の多くが通学に利用しているJR姫新線の利用者が伸び悩んでいるのが課題です。鉄道がなくなれば高校に通えなくなり、高校がなくなれば鉄道は成り立たなくなり、町から人が出ていってしまうでしょう。地域を存続させるうえで佐用高校や若い高校生との存在はとても重要であり、高校3年間で過ごすなかで佐用に愛着をもってもらうためにも、役場としても高校との連携は不可欠だと考えていました。つながりを求めているところに学校からお話をいただき、ぜひ一緒にやろうということになりました」（谷本さん）

地域の課題や求める人物像から、家政科では「佐用の特産品を活用する」

佐用高校の 取組のポイント

行政と密に 連携するには？

- 高校のニーズと地域のニーズをすり合わせ、「高校の教育活動の充実化」と「地域の活性化」という共に目指す地域協働の目標を設定する。
- 高校と地域とのつながりを深め、互いにメリットを享受できる体制を整えることで、行政が予算化するなど活動を支える財政基盤と支援体制を確保する。
- 高校と地域との橋渡し役を務める地域協働アドバイザーを配置することで、高校側からの依頼や相談を受け、案件に応じて役場や地域の人とつなぐ体制を構築する。

「佐用で暮らす人を守る」「佐用の水害から学ぶ」を3本柱としてカリキュラムを作成。地元の食材を使ったオリジナル商品の開発・販売、生徒による高齢者の居宅訪問、地域と協働した防災訓練や非常食の開発などに生徒主体で取り組み、3年間をかけて外部とのつながりや連携体制も整えた。しかし、事業の指定は2022年度で終了。プロジェクト継続のための資金確保を検討するなか、佐用町から支援の申し出があり、「輝く人づくり支援事業」の一環として3か年計画で佐用高校の教育活動（普通科・農業科学科含む）に予算がつくことになった。

「最初の3年間の取組を通して高校生と地域住民との間につながりが生まれ、特に高齢者は高校生との交流を楽しみにしていました。そうした活動を

資金がないからという理由でやめるのは地域のためにもならない、ぜひ継続しようと、予算をあてることになりました」（谷本さん）

自分たちの学びや実践を、 社会がどう受け止めるかを知る

こうして活動資金を確保でき、地域協働プロジェクトは現在も継続中だ。「予算がつくことで活動に制約が出てしまふと本末転倒。学校を応援したいという思いからあてた予算なので、使い道については学校に任せている」と谷本さんは言う。

2025年度から家政科長に就いた前野恵美先生は、外部と連携した取組を引き継ぎつつ、試行錯誤しながら新しいことにも挑戦している。「生徒が地域に出ていくのは、移動手段や時間

の確保において、また、高齢者施設や住宅への訪問は、感染症対策や個人情報保護の観点から配慮が必要が多く、ハードルが高い」と前野先生。前任校でも同様の課題があったが、「地域のの人に高校に来てもらう」という発想の転換で乗り越えたという。

「前任校では、保育園に通う子どもたちと一緒に、生徒が企画したおもちゃを作る、という活動がありました。生徒が保育園を訪れていたときは年1回しか実施できなかったのですが、園の送迎バスを使って園児たちに高校に来てもらうようにしました。年4回実施できるようになりました。佐用高校でも、地域の高齢者に学校に来てもらうなど、応用ができるのではないかと考えています。軸となる部分は引き継ぎつつ、よりよくできる部分は工夫したいと思っています」(前野先生)

一方、生徒が地域に出て活動する機会、社会を知る機会をつくり、地域と協働することも、意識している。

「これまでは商品の開発が中心で販売はイベント的でしたが、今年度からは買い手とふれあう機会を増やそうとしています。作って売って満足ではなく、大事なものは、自分たちが得た知識・技能がどう役立つか、自分たちが生み出したものが社会にどのように受け止められるか、を知ることです。地域の方々と直接コミュニケーションをとるなかで、

商品や接客がどのように受け止められるか、ネガティブな反応も含めてリアルに経験することが、家庭科という教科の学びにおいても重要だと考えています」(前野先生)

関わる大人がもつべきは、 危機感ではなくワクワク感

現在は、高校と地域との橋渡し役を務める役場の担当者が、高校側からの依頼や相談を受け、福祉、農業、産業など案件に応じて担当部署や地域の人とつなぐ体制ができています。「役場と学校との目線合わせを大事にしている」と谷本さんが言うように、年に数回は役場と高校が集まり意見を交わし合うほか、町長等も折に触れて高校に足を運ぶ。「科長として赴任した直後は戸惑いもあった」という前野先生も、「今はとてもワクワクしている」と笑顔を見せる。

「前任の先生が家政科全体で取組を共有してくれていたこと、そして、谷本さんをはじめ役場の方々と学校・学科として関係性ができていたことは、ありがたかったですね。人口減少や少子化といった地域の現状や課題を理解することは大事ですが、もつべきは現状に対する危機感や未来への不安ではなく、佐用をより良くするために新しいことに挑戦したいという前向きな気持ち。ワクワクしながら取り組むことが

大事なんじゃないかなと思います。今後は、普通科、農業科学科、家政科という3学科がある高校として地域にいかに関元できるか、他学科とも協力しながら3科協働に取り組んでいきたいです」(前野先生)

谷本さんも、「高校生のアイデアの実現をサポートできる体制を整えたい」と意欲を見せる。

「高校生にとって、自分のアイデアと行動力で地域を少しでも変えたとい

商品開発の授業では、調理専門学校の講師に教わりながら、佐用町の特産品「佐用もち大豆」を使った防災食を試作。ローリングストックを意識した防災食で、大豆に加えて野菜も摂取できるよう、また、災害などの緊急時でもストレスなく食べられるよう、具材や味付けを工夫した。



う経験は、とても大事なんじゃないかなと思うんです。将来の活躍の場が佐用であらうとなかろうと、高校生に地域に愛着や誇りをもってほしい。そう思うなら私たち地域の大人も、この町で輝く姿を見せるべきだし、この町の豊かさや魅力を感じてもらえるような発言・発信をすべきです。今後も高校や先生方と協力して、地域や高校の魅力を向上させる取組を実践していきたいです」(谷本さん)

「高校生訪問サービス」では、地域の高齢者の居宅を複数回訪問し、関係を深めている。調整のハードルが高いのが課題だが、楽しみにしている高齢者も多いという。

